

# 女子美

No.150/2005



追川尚子写真集  
日計り

- 2P OG インタビュー 追川尚子さん
- 6P 対談「タイポグラフィ・タイプフェイスのいま」
- 8P 横井玉子先生の胸像が完成 他
- 9P 別科特別授業&講演会報告 他
- 10P 「過剰包装の抑制」学生がポスターをデザイン 他
- 11P 付属高等学校 中国との国際交流がスタート
- 12P 女子美祭2004
- 14P JAM 展覧会・講演会報告
- 15P 講演会 舟越桂氏「おもちゃのいいわけ」
- 16P 大学院に新専攻、新研究領域が誕生 他
- 17P シリーズ歴史資料紹介⑨
- 18P 100周年記念大村文子基金 他

女子美術大学広報誌

## Interview ● OG インタビュー — 写真家 迫川尚子さん —

新宿駅ビル地下の「ピア&カフェ ベルク」。「一流レストラン顔負けの素材を使っているのにこの価格！」と思わず驚きの声を上げてしまう、厳選された食材を使った本当においしいフードを低価格で提供する小さなカフェ。一日の来客数が1500人以上というも顔けます。この店の副店長を勤めているのが、本学短大の卒業生、迫川尚子さん。この店の経営全般に携わりつつ、14年間毎日仕事の合間をぬって新宿界隈の写真を撮り続け、昨年初めて写真集『日記り』を出されました。大御所写真家たちから高い評価を受け、新聞や雑誌でも取り上げられているこの写真集。卒業後様々な仕事をこなしてこられた迫川さんの軌跡を、写真集出版に至るまでの逸話を中心に語っていただきました。

## 写真に出会うまで

— 女子美の短大では衣服デザインを勉強されていたということで、その頃から写真を撮っていらしたんですか。

迫川：小学生の頃から、妥協を許さないココ・シャネルの生き方に憧れていたんです。人間の体や立体的な造形にも興味があったので、大学の専攻は衣服デザインを選び、卒業後はテキスタイルデザイナーとして子供服のメーカーに就職しました。その頃はすべて手書きで、一日中水玉を描いていたり。4年ほど働いたんですが、田島征三さんの「しばてん」と長谷川集平さんの「はせがわくんきらいや」という2冊の絵本に出会いまして、それで突然、絵本出版社に転職したんです。本当に思ったらすぐ行動するタチなので。写真を撮始めたのはその後です。その頃、岩手を旅行したのですが、弟から奪い取った高級なカメラで、宮沢賢治の詩に出てくる種山ヶ原を撮ったんです。シャッターを押した瞬間に、何か得体のしれないものが入りこんでくるような感覚に襲われて。帰ってから、「写真って何だろう？」と初めて考えました。神保町の古本屋さんで東松照明さんの「日本」という写真集を3万で買いました。「写真でこんなことができるんだ」と感銘を受けて。それから現代写真研究所が毎年出している「視点」を本屋さんで見つけたんです。それま

で見てきたものとはまたちょっと違うタイプのモノクロ写真ばかりで、とても気になって。すぐに電話をして見学に行き、即入学を決めてしまいました。働きながら、夜間のクラスに週1回通ったんです。モノクロは、自分で焼けるというのがまず大きな魅力ですね。一から教わって、自宅の台所を暗室にしたんです。お風呂場か台所が悩みましたが、お風呂に入れないのはさすがに困るので。研究所には4年間通いました。

## 一日でも長くお酒が飲みたい

迫川：出版社に勤めつつ写真が楽しくなり始めた頃、ベルクの店長に、「一緒にやらないか」と声をかけられました。出版の方を続けたかった私は、最初は断ったのですが、最終的には、写真と店を両立することを決めてベルクを始めました。店が軌道に乗るまでの3年間は、朝から夜までひたすら雑務に追われっぱなしの毎日でした。でもこの世界に入るまで、まさか自分が調理と真剣に向き合うとは思ってみませんでした。

— お店で出しているパンやソーセージ、チーズ、コーヒーなど、素材にすごくこだわっていらっしゃいますよね。どのようにして探されたんですか？

迫川：店が新宿駅構内にあるので、物も人も集まりやすいというのはありますね。売りこみもありますが、こちらから職人の腕

に惚れこんで出向く場合もあります。私たち自身には何の後ろ盾もありませんが、やはり場所の威力ですか、そこで何か面白いことをやりませんかともちかけると、のってくる可能性が高い(笑)。職人は頑固ですからね—なかなか譲ってくれないこともあります。そこは情熱で押し倒して(笑)。—材料にとってもお金をかけていらっしゃるのに、値段的にはものすごく抑えて提供していますよね。

迫川：薄利多売なんです。でも、これだけ多くのお客様を支えられなければ、ありえないことですよ。

—調理師免許や咧酒師の資格ももっていらっしゃるそうで。

迫川：店での経験が生まれました。調理もそうですが、お酒も、結局ノウハウなんてないじゃないですか。何か新しい発見はないか。それをお客様やスタッフと分かち合うのが好きなんです。咧酒師の資格も、最終的にはそういうところが問われるんです。とにかく一日でも長くおいしくお酒を飲みたい(笑)。食へのこだわりも、結局私の場合、そこからきているかもしれません。

## 森山大道さんにご挨拶に行かなければと

迫川：店が年中無休で、私自身が年に2、3日しか休みをとらないので、毎日新宿にへばりついているような状態です。ただ、写真はやりたい。なので写真は仕事をちよ



こちょこ抜け出して撮りました。13年分ほど撮りためて、何らかの形にしたいと考え出していた頃、現代写真研究所の先生でもある金瀬胖さんから、「写真集を作らないの?」と聞かれまして、そこから始まったのですが、「ああ、きたきた、待ってました! あなたの様な協力者を。」という感じでしたね(笑)。ダンボール10箱分の写真を焼きまして、金瀬さんのお宅に送って、編集作業が始まったんです。3作目のダミー本を、写真家の森山大道さんに見ていただくと思いましたが、私の写真は「新宿」じゃないですか。これはやっぱり「新宿」を出された森山さんにご挨拶に行かなければいけないと思ひまして。お会いしたかったというのがあるのですが、ご連絡をして、何とかお時間を作っていただいたんですね。その時に、「おー」とかいい反応をしてくださって、その場で、「もし写真集が完成したら「帯」書いていただけませんか」といってみたら「いいですよ」と。あれー(笑)。「えー、森山さん、大丈夫ですか、本当にいいですか。もうノートに書いてしまいましたからね。」とかが言って「帯、森山大道」と、ちゃんと自分のノートに書いて・・・。

—「寺山修司が新宿のネルソン・オルグレンならば、迫川尚子は新宿のヴァージニア・ウルフである。」と。この帯文は、森山さんご本人に聞いたんですか?

迫川：校正刷りを見ていただいたときに、森山さんがご自分で鉛筆を出して、その場で書いてくださったんです。森山さんと寺山修司さんの関係というのは伝説じゃないですか。だから、この言葉をいただいた時には、ちょっと驚きました。森山さんは、「今、浮かんじやったんだよね、どう?」とおっしゃっただけ。でもその後、いただいたお葉書に、「ヴァージニア・ウルフのデリカシーに近かったの」と。

## 絢さんに本を借りる

—写真集の別冊付録には文芸評論家の絢秀実さんの文章も寄せられていますよね。

迫川：『日記り』を作っている時には、今まで自分に起こったことが全部一つにつながっていくような感じがしました。一つには、山本陽子さんという詩人の詩の中に「空

隔」という言葉があるのですが、その言葉が頭から離れなくて、彼女の絶版になってしまった詩集をどうしても読みたかったです。ちょうど絢秀実さんに、山本陽子論があるのを知ったんですね。寄れば容赦なく斬られそうな評論家の絢さんに、詩集をお持ちですか?といきなりお電話をして(笑)。実際にお会いしてみると、とても気さくな方で、貴重な本をすんなり貸してくださったんです。ダミーをお見せしたら、絢さんが、「これは新宿の空隔ですね」と言ってくださり、文章もお願いしたら「いいですよ」と(笑)。文章を書いていただいた英伸三さん、平井玄さん、鈴木一誌さんのところへも直接お願いしに行きました。付録といっても23頁あって、執筆陣はそうそうたる顔ぶれですし、これだけでも絶対お買得だと思いますよ(笑)。

## ダンボールハウス村に通う

—西口のダンボールハウスのあたりもたくさん撮っていらっしやいますか。

迫川：たしか89年の成人式の日、浅草の場外馬券売場の前に座っていたおじいさんを撮らせていただいたんです。その方に、「もし、私みたいなのを撮りたいのだったら山谷に行きなさい」と言われたんですよ。私、山谷という言葉すら知らなくて、地図にものってなくて。その後カメラを持って行ってみたんですが、もう、とてもとても、鞆からカメラを出すような空気ではなくて、1枚も撮れずに帰ってきました。それがずっと心に残っていたんですね。失業者の現状などについてはずっと本や情報誌で追っていました。96年の1月24日に新宿でホームレスの強制撤去があって、早朝のテレビのニュースで流れたんです。すぐに見に行ったら、お巡りさんやホームレスでごった返しているんですよ。思わず撮りまくってました。西口のダンボールハウス村には毎日通いました。そこの住人たちが他愛ないおしゃべりをしたり、お菓子をごちそうになったりしながら撮った写真ですね。97年の火事でなくなるまで、そこには郵便も届いたんですよ。ホームレスの支援者や取材の方たちと路上写真展をやったりもしました。



## 気配に誘われてシャッターを押しているところも

—迫川さんの写真を見ていると、たった10年程前の写真とは思えないものがほとんどなのですが、でも90年代の写真なんですよ。

迫川：ちょうど60年代、70年代の面影がまだ残っていたんですよ、駅の南口のあたりなどに。92～93年ぐらいにたぶん、取り壊されたと思います。ここは、もっともっと撮りたかったんですよ。ギリギリ残っていたところですよ。

—60、70年代の面影がある程度残っているところを選んで撮っていたりも?

迫川：そんな意識はないのですが、とにかくその場所に惹かれました。なんでだ、と言われると困っちゃうけれど。何となく、「気配」に誘われてシャッターを押しているところはあるかもしれません。人がいなくても人の気配だとか、猫がいなくても猫がいた気配だとか。それを、私の中ではやっぱり「空隔」と言っているんです。例えば、人と話すときってバリアーを張るじゃないですか、どんな人でも。その人自身にその人の本質があるという訳ではなくて、そのバリアーを張っているところあたり、ちょうど境目のあたりに、ふわふわと、あれ?この人?といえるような、いえないような何かが漂っていることがあるのね。そういったことかな? なんて、後から自分で分析しているんですけど、でも、よくわからないんです、本当は(笑)。とにかく、気になるものを撮ったという・・・。



## ギャラリーの仕事

—ベルクの壁をギャラリーとして使って、月替りの写真展をされていますが、写真家の方をどのように選ばれているんですか。

迫川：店の壁だけは何か解放区のようにしたくて、ベルクをはじめて5年ほど経って、本橋成一さんのオリジナルプリントをご自身の提案で飾りました。それがきっかけですね。テーマもいきなりチェルノブイリでしたからね。飲食店だからといって特別な規制をしたくはないですね。むしろ普通お店で飾らないような写真もベルクでは飾ってみたいと思っています。とにかく写真に対して貪欲なので、私自身がいろいろな写真を見てみたいんです。写真のコーディネーターと写真家は両立しない、と昔、写真家のキム・チョンゴンさんに言われたことがあります。私としてはやっているつもりですが、どうでしょう、キムさん！（笑）

## 厳しいことを言ってくれる人は減っていく（笑）

迫川：大学時代は寝るのがもったいないほど夢中でしたね。あの頃は仲間と何でもやれる気がしていました。ファッションショーを毎年学園祭でやるときの、あのエネルギーはすごかったですね。私たちは授業以外にも、他の美大の友人たちと芝居やショーを企画したりしていました。三日くらい徹夜して、自主休講で衣装を仕上げたり（笑）。先生方はとても厳しかったですが、

## 写真集を出して、また新しいことが起こっているんです。

迫川：この写真は高田馬場のお豆腐屋さんです。撮らせてもらった写真は、ご本人に渡せるものなら渡したいのですが、なかなかそういきません。この写真も、偶然通りかかった場所だったので、後からどこで撮ったのかもわからなくなってしまっていたんです。ところが、このお豆腐屋さんの甥っ子さんが『日計り』を取り上げた新聞の記事でこの写真を見て、お電話をくださったんです。四十何年間続いたお店が今月で閉じることになって、「記念にこの写真をおじさんにプレゼントしたい」と。マスコミに出て思いもかけない反響がありましたね。写真集を出したことによって、何かまた、新しいことが起こっているんですね。





あの厳しさが今思えば本当にありがたいです。  
—女子美の後輩たちに何か、メッセージとかございますか。

迫川：私はかなり無茶をしたので、お手本になるかどうかわかりませんが、あえていえば、いつかやるのではなく、今やる。目の前のやれることを。広く浅く何でもやるよりは、ひとつのことを掘り下げた方が、全く別の所で深く掘り下げた人ともそのレベルで話ができるし、かえって世界が広がるような気がします。だからやれることは迷わず、これでもかかっていうぐらいにとことんやってほしいですね。

それと、自分にとって一番厳しい言葉にこそ耳を傾けたい(笑)。やっぱり年を重ねるごとに厳しいことを言ってくれる人は減っていくし、言われるのも嫌になってくるんですよ。若いうちは若いというだけで言いやすいし、言われやすいの。それがあある時難しくなる。その時に気をつけなければ。幸いなことに、私はまだ周りが厳しい方ばかりなので(笑)。

あと、相棒を見つけるというのもいいかもね。友達でも恋人でも、パートナーでも何でも。自分の投げた球を絶対に受けとめ

てくれる。そして、自分も相手の球をちゃんと受けとめられる。そういうキャッチボールができる相手が1人でもいると人生一味違う気がします。

—今後何か、新たにやってみたいことなどはありますか。

迫川：やっぱり、この写真集の最後に2作目もよろしくね、と書いてしまったので(笑)。2作目は何とか出したいと思っています。

半身浴を始めたんですよ。お風呂場に機材を持ちこんで、今まで見れなかった分を取り戻そうと毎日映画を見ています。ソク一口つとかコスタとか、世界にはこんなことをやっている人がいるのかと思うと、私もうかうかしてられないな、次は何をやるのかな、と。次から次にやりたいことが出てきます。まだまだ時間が足りないくらい(笑)。

(インタビュー・文：広報課 林 亜紀子)

〔写真〕

- 表紙 1994年 甲州街道付近
- P2 1996年 新宿駅西口ダンボールハウス村
- P3 1996年 西口地下インフォメーション前広場
- P4 1992年 新宿駅旧南口広場
- 1993年 ルミネ横
- 1992年 高田馬場3丁目
- P5 1999年 歌舞伎町1丁目



迫川 尚子 (さこかわ なおこ)

鹿児島県種子島生まれ  
女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業  
「BEER & CAFE・BERG」副店長  
写真家



BEER & CAFE・BERG店内(新宿東口)

## Topics ● ① 「タイポグラフィ・タイプフェイスのいま。デジタル時代の印刷文字」 対談：森啓教授×伊勢克也教授

2004年12月4日(土)、相模原キャンパスにおいて、日本のタイポグラフィとデザインの歴史から将来までを論じる大型シンポジウム「タイポグラフィ・タイプフェイスのいま。デジタル時代の印刷文字」が開催されました。柏木博氏による基調講演に始まり3部、6時間半に渡る講演を、約400人の聴衆が傾聴しました。

第1部は「印刷書体設計の回顧と展望」と題し、日本を代表する書体設計家5氏—桑山 弥三郎・中村 征宏・篠原 榮太・鳥海 修・小塚 昌彦の各氏—が、金属活字から写真植字、デジタル・フォントへといたる3時代を見渡しながらか、アルファベット書体に比べて課題の多い日本語の書体設計について制作過程や背景を披露されました。続く第2部「デジタル時代のタイポグラフィ

**伊勢**：まず、正直、これはもう聞けないかもしれない貴重なシンポジウムだ、と思いました。展示会も、文化的・知的な資料として、たいへん重要だったと感じます。

**森**：私がプロデューサーの役割を担ったので、最初に企画の理由をお話しましょう。

最近では、携帯画面にみられるような情報伝達のための文字が意識され始めましたが、日本の文字、特に印刷文字については、あまり総合的に論じられてきませんでした。そこで、複数のデザイナーの書体を一堂に集めて比較検討し、文字を組むタイポグラファーに出席していただきタイプフェイス、タイポグラフィの課題を、広く検討する必要がありますがあるな、とかねてから思っていました。

ひとつは時期的な理由です。現在、活版、写真植字、デジタルという、3つの印刷システムが揃い、最初の金属活字を使った活版印刷が忘れ去られる前に、課題を整理しておく必要があるな、と。

二番目に、タイプフェイス・デザイナーの世代交代期でもあります。活字を知っていて、なおかつ写植を経て、デジタル・フ

使用書体を語る」では、タイポグラフィを使う側の立場からデザイナー5氏が、デザインの現場での書体と創造性について語られました。最後に第3部「デジタル時代の印刷文字」で、書体設計家、デザイン評論家、デザイナーの6氏が、歴史・社会的視点もふまえた電子時代の文字の姿を、様々な角度から討論されました。また、2004年11月17日～12月20日には、相模原キャンパスの女子美アートミュージアムで、第1部で講演された書体設計家5氏の展示会も開催され、好評を博しました。

ここでは、今回のシンポジウムの企画から実現にいたるまでの中心を担われた森啓先生と、デザイナーとして発言された伊勢克也先生が、シンポジウム後に行った対談をご紹介します。

フォントまで設計した人たち…今回のシンポジウムでは小塚昌彦さんや筆書きの篠原榮太さんですが、彼らがそろそろ70代です。その人たちがリタイアする前に、伝えるべき情報が伝承されるべきだと考えたのです。

また、書体デザインは、昔は印刷業界の字彫り職人さんや写植の文字書きの人たちの仕事でしたが、近年のタイプフェイス・デザイナーは、多摩美と武蔵美の関係者がほとんどでした。女子美は書体設計の分野ではあまり役割を担ってこなかったが、かえってニュートラルな立場で、総合的な討論の場を提供できるのではないかと考えました。

### 書体を作る側と使う側のインタラクション、社会的な意義も探求したシンポジウム

**森**：書体というと、見出しや広告など商業シーンに送り出されるデザインばかりに社会の注目が集まりますが、一番重要な本文書体、テキストの基本的な文字を設計しているタイプフェイス・デザイナーたちに、仕事の全体像を披露してもらいたかったんです。日本の漢字は印刷用に使われているものだけでも5万字を超えます。最近ではフォント作成支援ソフトのおかげで少しは仕事が楽になりましたが、今度は個性的な文字を作ろうとした場合に、イメージを形にできる才能を持った人が経験を積み、60歳から70歳でひとつの書体を作るとい



展示会風景

た、高度な完成度が要求されています。

今回のシンポジウムでは、この本文書体の設計家で、個人またはグループで活動されてきた5人を招聘しました。それから、書体を使う側のタイポグラファーとも相互に討論する必要があると思い、やはり5人のデザイナーに来てもらいました。伊勢先生には、アイデア・ソースと自分の関わりや、デザイナーとして文字を作るときに必要なものを、学生たちに伝えていただこうとしました。

**伊勢**：僕自身、なかなか書体設計の世界の情報がないな、どのように書体ができたんだろう、と思っていたんですが、作ったご本人を前にして、もう「ナール」とか「ゴナ」って、呼び捨てにできませんね(笑)。



展示会場でも、「ナールっていうのは、中村征宏さんっていう人が作ったんだー」などの声が聞こえました。日本の近代デザインの重要な部分が情報として抜けていたわけで、今回の企画がその空白を埋めたといえます。

**森**：何よりも、空気のような存在の、場合



**伊勢克也** (いせ かつや)  
 本学短期大学部 造形学科デザインコース教授  
 1960年 岩手県生まれ  
 1984年 第5回日本グラフィック展大賞  
 1985年 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了 修了制作買い上げ  
 1994年 東京タイポディレクターズクラブ年鑑会員の部 銀賞

によっては新聞なんかだと足で踏んでいるような(笑)印刷の書体が、実はどこかの人が精魂込めて書いた文字だということに参加者の多くの方が気づいたことはすごく大きなことですね。

**伊勢:** もっともっと、書体の重要性を世の中に広く知らしめたほうがいいですね。

**森:** そうです。広く社会的な意味づけも欲しくて、柏木博さんから研究者の方に、日本の文化や歴史のどこに、タイプフェイスやタイポグラフィは位置づけられるか、についても語っていただいたんですね。

**伊勢:** 学生にとっては少々レベルの高い内容だったと思います。学生のときは感覚的なことにはすぐ反応できますが、構造とか論理になると弱いです。でも、午前中から聞いていた学生はかなり驚いていましたね。「何万字も手で書いたんだ!」と。その仕事をした人が目の前にいるリアリティですね。それから、実際に「タイポバンク」などで文字の仕事をしている卒業生も来て、改めて自分の仕事を振り返った、と。

**森:** 現場のプロレベルに照準を合わせたほうが、社会的関心も広く集まり、実際に仕事をしている卒業生やデザイナーたちも来てくれるだろう、と思いました。「タイポバンク」というのは、桑山弥三郎さんと武蔵美の卒業制作で「タイボス」を作った4人のうちの、林隆男さんが作られた会社ですね。

**伊勢:** ヒラギノ・シリーズや游明朝体を作った鳥海修さんの「字工房」と、「タイポバンク」が組んで仕事をするような新しい流れも、デジタル化の中でありますね。

**森:** 今は、同じようなコンピューター・システムでデザインするので、共通の場にノウハウを持ち寄って仕事をしよう、という動きも出てきたんですね。コンピューター技術はある種の開放性を持っていて、その先は本当のイメージ勝負になりますから、個々のアーティストはやりやすくなるだろう、未来はその点で開けていくと思います。

## 日本語のタイポグラフィとその後

**伊勢:** 活字から写植、デジタル・フォントの時代へと移るなかで、効率だけを追い求めがちという近代化のマイナス部分を日本の文字が逃れ、地道な作業の中で、漢字の「美しさ」とかロマンチックな部分も残されてきたことは奇跡的だと思います。

**森:** 中国でも簡体字を使用しているし、韓

国は、国家主導でハングル文字を導入したので漢字の使用が減少しました。漢字文化圏では日本だけが、元々の形で漢字を残してきたといえるでしょう。それから、日本語は漢字かな混じりなうえに、新しい外来語はカタカナ表現してしまうという、包容力の広さがありましたね。最近では、明朝体が嫌いな子どもが多いと言いますが、その子たちが魅力を感じる新しい書体が出てきていいと思いますね。

**伊勢:** シンポジウムでは縦組、横組の話も出ましたが、雑誌などは動くメディアですから、文化的にある書体がすぐわなくなってくることもありえるし、文字の形も動いていくのではないのでしょうか。

**森:** そうですね。今までは、印刷など技術的な制約に文字が抑えられていたんです。日本語は文字の数が多いため、明朝体だけでも設計に一生を費やさなければできなかったので、印刷会社や新聞社でも自分のところの書体しか作らないという環境だった。それが、コンピューター・エイジになって、今度は多くの書体を技術的な負担なしに設計できるようになった。コンピューター時代の本当の豊かさという選択肢を増やしていけば、その中で良いものと悪いものも自然に決まり、ある書体がひとつの文化を創っていくこともできるでしょう。「ケータイ」の文字が、自分たちにとって本当に良い文字かどうかなど、見る側、つまりデザインを享受する側が、身近な書体を検討する目を持ち、自分の選択の持ち札を増やすことが必要になってきます。

**伊勢:** シンポジウムで、日本語にとって重要なのは、デジタル化によって文字が「民主化されたこと」だという発言もありました。ワープロやPCで誰もが文字が打てるようになった。文字数の少ない欧米ではタイプライターで一般の人も昔から文字を打っていたかもしれないけれど、日本ではやっと最近です。未発達な部分も多く、組版や書体の禁則もまだあるようではないですね。

**森:** 高校生の言葉使いに顕著のように、言語というのはある程度、流動的です。ただ、「書く」言葉はもう少しルールがあっても良いのではないかと、という考え方が西洋社会のオーソグラフィー(正書法)ですね。日本でも出版社や新聞社内部にオーソグラフィ的なルールがありますが、そういうハウスルールを一般の人も、家庭ごとに作る時代が来るのではないかと。その段階で、そうした窮屈なルールはやはり要らないとか、あるいは何が大事か、とみなさんが考え始

## 森啓(もり けい)

本学大学院教授  
1935年 東京生まれ  
1962年 日本大学芸術学部卒業

桑沢デザイン研究所講師、武蔵野美術大学造形学部講師、千葉大学工学部画像応用工学部講師、明星大学日本文化学部教授などを歴任。デザイナーとして、グラフィック・編集・ブックデザイン、タイポグラフィ、書体設計などの分野で活躍。また、近代デザイン、印刷デザイン、印刷技術、出版史などを研究。著作に『写植教室』(1965)、『私観戦後グラフィックデザイン』(1971)、『世界デザイン史』(1996)、『活版印刷技術調査報告書』(2002)など。



める時期が来るでしょう。ただ、自分なりの選択眼というのは、見ているだけでは身につかない部分もあって、女子美生のように自分の手で作業することは重要です。一度でも自分で書体を書けば、見る側から作る側にまわることができそうですから。

**伊勢:** 書体を書いて、組んでみる。実際に文字を組むのは、僕らが学生の頃の方が難しかったんですよ。漢字のタイプライターで打って、スペーシングを見ながら、一字一字切り貼りしていた。今はコンピューター上で、全体を目で確認しながらできます。

**森:** トレーニングの過程では、目で見て、手が言うことを聞いて、それをまた目に戻す、と時間がかかりますが、今はマウスひとつでもそのような作業ができますから、学生さんにはできるだけ何度も、自分の目と手で良いデザインを作る過程を、経験してほしいですね。

**伊勢:** 書物でもパンフレットでも、精魂が込められた、「気持ち」を感じるものに出会うと感銘を受けます。日本語の言語構造は複雑ですが、デジタルの技術が一般化されてきて、そのテクノロジーをうまく使い、タイポグラフィや文字の使い方が面白く、美しくなっていけばいいな、と思いますね。

## <シンポジウム 参加者紹介>

- 「タイポグラフィ・タイプフェイスのいま」  
デジタル時代の印刷文字」  
基調講演:「書体デザイン 回顧と展望」  
柏木博  
第1部:「印刷書体設計の回顧と展望」  
桑山弥三郎、中村征宏、篠原榮太、鳥海修、小塚昌彦 以上5氏  
第2部:「デジタル時代のタイポグラフィ」  
使用書体を語る」  
伊勢克也、小泉均、小山壽久、中川憲造、林規章 以上5氏  
第3部:「総括 デジタル時代の印刷文字」  
白田捷治、柏木博、後藤吉郎、小宮山博史、山本政幸、永原康史 以上6氏

## NEWS ● ① 横井玉子先生の胸像が完成

2004年10月28日、生誕150年を記念して、女子美の創立者の一人である横井玉子先生の胸像の除幕式が、杉並キャンパスで行われました。除幕式には先生のご子孫にあたる横井和子さん、胸像の制作を行った立体アート学科の津田裕子教授他、関係者が出席し、大勢の同窓生・教職員に見守られる中、凜とした佇まいが印象的な横井玉子先生の胸像が披露されました。横井和子さんからは「玉子さんのお噂は祖母から聞いており、本当にお慕いしておりました。玉子さんのお墓は東京芸大の寄宿舎から近かったため、いつも何か辛い事があったり、試験の前にはしょっちゅうお参りをしており、玉子さんは私にとっても非常に懐かしい方です。横井

家で横井姓を名乗るのは私が最後となります。全て佐藤志津様のお力があって今日がございますが、昔の苦労していた時代の事を、皆様が労い、このような胸像を設置して下さったことを、子孫といたしまして熱く御礼申し上げます」との謝辞が述べられました。なお11月9日には相模原キャンパスの、女子美アートミュージアムにてピアニストでもある横井和子さんのピアノリサイタルも開催されました。

### 横井玉子先生の肖像を作り終えて

横井玉子先生の肖像制作のお話を頂いた時は、難しい事だと思いながら、私には大変な難題でした。手元に3枚の写真が届きました。凜として正面を見つめる和服姿の知性と気品の漂う、それでいてモダ

ンな先生に、すっかり囚われてしまいました。それから先生との格闘の日々でした。明治という疾風怒濤の時代に、津田梅子・下田歌子などの様に新しい女子教育界の権威として生きたのではなく、極めて特異な女子の美術学校を創設した先生の詩と真実を、どこまで探り採れたか？本校の庭に建つ像の前を通るたびに、嬉しさと不安が波立つのです。

(芸術学部立体アート学科教授 津田裕子)



横井和子さん



製作風景

## NEWS ● ② 広州美術学院で出張講義

メディアアート学科は、設立初年度より中国の広東省広州市にある本学の協定校、広州美術学院の新媒介（メディアアート）学科と交流を進めてきました。2001年の初年度には5名の本学教員が広州を訪れ、講演会や実習を担当しました。今年度は9月6日から10日までの5日間、羽太謙一先生と私が出張授業を行ってきました。

羽太先生は三次元バーチャルリアリティーの元となる空間モデリングを課題にされました。二十数名の学生達が最新のパソコンで三次元CGに取り組み、あらかじめ大きさを統一した仮想の空間を部屋に見立て、その内部を学生が个性的にデザインします。最終的にそれらのデータを本学のバーチャルリアリティー装置 CAVE で連結

して回廊巡りのような仮想現実空間として表現されるという大変興味深いものです。

私は、新媒介学科の3年生と4年生約三十五人の特設クラスに光造形という分野の課題を担当しました。「光」をメディアとして捉えた造形表現に取り組む実技課題です。家庭で一般的な電球を一つずつ学生に配り、それを使って形作れる照明オブジェや、光のみでなく影や陰の効果に着目した空間インスタレーションを構想し実行してみようというものです。

急速な経済成長の真只中にある中国では、沿岸を中心に、都市環境や市民の生活文化が大きく変化してきているようです。経済活動の活発化に伴い、大衆的な購買と消費が増大し、ライフスタイルが様変わり

しています。その分、デザインやアート等の文化活動に対する活発な需要が生じているようです。

来年度以降も女子美と広州美術学院との相互訪問、交換授業や留学生派遣などの交流が期待されます。

(芸術学部メディアアート学科教授 ヤマザキミノリ)



## NEWS ● ③ 杉並区のお他大学の図書館利用が可能に

図書館では昨年7月、学生、教職員の研究支援を促進し、地域に根ざした生涯学習機関となることを目指し、杉並区立図書館を中心として、杉並区に所在する大学・短期大学図書館（女子美術大学図書館、明治大学和泉図書館、高千穂大学図書館、立教女学院短期大学図書館、東京立正女子短期

大学図書館）が連携する「杉並区図書館ネットワーク」に調印しました。これまで他大学図書館を利用する際に紹介状の発行が必要でしたが、本ネットワークに加盟する大学図書館であれば、11月からは事前の手続きがなくとも利用できるようになり、利便性が向上しました。また、杉並区民へ

の図書館利用開放も8月から既に始まり、美術に関心の深い方から利用いただき好評を博しております。現在は閲覧や貸出に限られていますが、今後は加盟機関による講演会、資料展の開催等も企画しつつ、さまざまな人的交流の輪を広げていくことになります。

(図書情報センター)



## Topics ● ② 別科特別授業&講演会 報告

### 脇田愛二郎客員教授引率による自作彫刻のウォッチング

昨年7月6日、4月にオープンしたばかりの「明治大学アカデミーコモン」にて、脇田客員教授引率による自作彫刻の見学会を実施しました。東京・駿河台にある「明治大学アカデミーコモン」は生涯教育の拠点としてユニバーサルデザインを目指してつくられた施設で、研究室や教室、大講堂、博物館などで構成されています。建物周辺や建物内に脇田教授の彫刻作品が設置されており、今回は教授に引率していただき、学生に自作彫刻の解説をしていただきました。参加者の募集にあたっては大学・短大・学科・専攻等の枠を設けない形をとり、別

科の学生の他、立体アート学科の学生も参加しました。

#### 場所と一体化しながら存在感のある彫刻 (芸術学部立体アート学科1年 田尻 紘)

今回観た作品は設置場所の明治大学に合うようなとてもデザイン性の強い作品ばかりでした。大学の広場の南側には立体グリッドが池の上に組まれ、そこに脇田愛二郎先生のパイプによる立方体を回転させた軌跡を表現する彫刻が付けられていました。建築や広場と一体化してながらも、存在感のある環境彫刻でした。ほかの作品も同じテーマの作品が宙吊りされ空間を演出していたり、裏側やホールにも作品設置されてありました。どの作品も場所の空間をとともうまく利用していました。いくつかある作品の中で野外に設置されているもので、同じようにパイプによる立方体が自然の風によって回転するという作品がありました。風で立方体が回転すること

によって作品からできる影も同時に変化していました。この作品は時間やその日の気候によって様々な表情をみせてくれる作品だと先生がおっしゃっていました。実際に作品をみながら脇田先生がとてもわかりやすく、丁寧に説明してくださり、短い時間を本当に有意義に過ごすことができ、良い体験ができました。



### エヴァ・マリア渋谷氏 公開講習会&講演会

「日本と欧州の現代美術とその交流」

昨年7月12日、「絵画」の授業の中でデュッセルドルフ国立芸術大学出身のエヴァ・マリア・渋谷女史の公開講習会と講演会を開催しました。「絵画」は教員免許取得のための授業で、公開講習会には教職課程を履修中のほぼ全学生が参加し、講演会には別科現代造形専修の学生、学部学生他、多数の参加がありました。

#### エヴァ・マリア先生による講習

(造形学科デザインコース クラフトデザイン系  
テキスタイルデザイン2年 播磨 志津子)

絵画の授業で、エヴァ・マリア先生による公開講習会に出席し、自らの作品を講評していただきまし

た。デッサンと油絵の二点をみていただき、じっくりと作品を見つめ、思ったことを言葉で優雅に表現し、先生自身が感じたことを述べられました。それは決して「このようにした方がよい」というアドバイスではなく、「こっちの方があなたらしい」という自分の作品に対しての本人らしさということでも大切な位置づけをもって講評して下さいました。また、「とてもおもしろい」と言って、褒めるということ必ず一人一人に対してしていただき、講評後も制作者がどう動いていけるかという意味を込めているのがすごく伝わってきました。制作者のもっている本心が引き立つような部分を決して見逃さず、作品を客観的に捉え、他者のものにとらわれずに、その作者自身が持つ良さや人柄と共に観察し、会話でコミュニケーションを交わすということ必ず行っていることに気が付きました。作品の良さや欠点を、作品を誰よりも長く見ている制作者よりも、遙かに短い時間の中で、ひとりひとりの個性溢れる特質も掴んで言葉で表現するということは本当に難しいこ

とであり、簡単には出来ないことです。また講演会では、コメントと共にたくさんのスライドを拝見しましたが素晴らしいものばかりでした。これから自分と向き合い、対等に制作をしていく中で、大いに参考にしていきたいと思います。



## Topics ● ③ 陶芸作家 高鶴元氏 特別講演会

米国在住の陶芸作家、高鶴元(こうすけ げん)先生の特別講演会「わが陶芸人生」(主催:芸術学部工芸学科・教育支援センター)が11月24日、相模原キャンパスで開催されました。

はじめに、NHKで制作された、制作現場や作品発表の様子を紹介したビデオを放映され、その後講演が開始されました。

高鶴先生(1938年福岡県生)は子供の頃から独立心、反骨精神が強く、陶芸家の家に生まれながらも、早くに独立されました。その後は朝鮮半島から日本に連れてこられた陶器職人達が残した陶片の収集を行い、古陶器や釉薬の研究を進められました。30歳過ぎに日本工芸会正会員になり、百貨店などで展覧会を開けば即日完売となるような陶芸家として成功されました。しかし大金を稼いでは友人知人と散財す

るような人生に疑問を感じ、周囲の反対を押し切って渡米する事を決断されました。アメリカでの生活は、初め様々なトラブルに巻き込まれるなどご苦労されたようですが、自由な雰囲気と異文化との接触は先生の制作活動にとって大変刺激的な毎日だったようで、数年で帰国するつもりだったにも関わらず、以来、米国に永住し作家活動を続けていらっしゃいます。(87年に永住権を取得)「私は社会から評価された作品は二度と作りません。自分で自分をコピーするようになっては芸術家ではないと言いつけています。常に自分自身を壊し続ける事が大切だと考えています。『Change(チェンジ)』『Challenge(チャレンジ)』『Create(クリエイト)』この3Cが私の信条です。」という言葉がとても印象的で、強く大きなエネルギーを感

じることでできた講演会となりました。

当日、会場には、高鶴先生のセラミック(金属)を使用した非常に斬新な作品も数点、特別展示され、講演終了後、学生達は、その作品をとりかこみ、熱心に鑑賞し、様々な感想を交わしている場面も見受けられました。

(芸術学部工芸学科助教授 山本健史)



## NEWS ● ④ 「過剰包装の抑制」 学生がポスターをデザイン

今年度、杉並区では「すぎなみ環境賞」を創設しました。この賞は、杉並区内の団体や個人で、環境に貢献した方々を表彰し、区民みんなで環境問題を考え行動することを目的にしています。

2004年は、ごみの量を減らすため「過剰包装の抑制」がテーマ。環境大賞とは別に、環境に良くない過剰包装をする企業や業界に対して「厚着賞」という賞を授与し



てしまう過激な賞が設定されました。ちょうどアカデミー賞に対してのラズベリー賞のような形です。例えば、お歳暮、お中元商品やコンピュータソフト販売用のパッケージは、紙やダンボールによって過剰に包装されています。消費者は、結局ごみになるものまで買わされている状態です。できるだけごみにならないパッケージを考えてもらう、ごみの発生源自体を減らそうというのが「過剰包装の抑制」の狙いです。

毎年、「マイバッグ推進運動」の一環でポスター制作をしている有志メンバーに「すぎなみ環境賞」告知のポスターとトロフィーのデザインの依頼がありました。学生デザインの中から、メディアアート学科1年中村有希子さんの作品が選ばれ、ポスター、チラシ、そしてイラストをもとに中村さんにトロフィーも制作してもらいました。

10月17日には「環境博覧会すぎなみ

2004」の会場において表彰式が行われましたが、予想通り、「厚着賞」を受賞した団体は会場に姿を見せず、代わってトロフィーデザインした中村さん自身が、ポスターイラストと同じ衣装メイクで登場し、山田宏杉並区長よりトロフィーを受け取りました。区長いわく、「厚着賞」を受賞した団体が、数年後、「すぎなみ環境大賞」を受賞されることを期待します、とのことでした。  
(芸術学部メディアアート学科 助教授 川口吾妻)



## NEWS ● ⑤ ブータン王立美術工芸学校長が岩絵具製法を学ぶ

ヒマラヤ山脈の東側、ブータン王国東部の都市タシ・ヤンツェにある王立美術工芸学校のラム・ケザン・チョペル校長と、首都ティンブーにある王立美術工芸学校のジグメ・イエツェール校長が、国際交流基金の助成を受けた日本ブータン芸術委員会<代表理事：山田真巳氏（日本画家）>の招きで、昨年10月12日から25日まで画材の研修旅行のため来日され、10月16・17日女子美術大学で岩絵具について研修されました。

仏画「タンカ」の画家でもあるお二人の学校長の今回の研修旅行の主目的のひとつが、ブータンから50年程前に消滅してしまい、中国やブータンでも発見できなかった

た岩絵具をブータンの現状に適合する製法について研修を受けることでした。顕微鏡などでタンカに適合する粒子の大きさを調べ、それらを元に数種類の鉱物を使い岩絵具をつくりました。持参された石からもヘマタイトのような美しい色ができ、先生方はブータンに機材も含めてどのように導入していけばよいかといったことまで検討され、研修は一応の成果をあげました。研修旅行の成果については、ラム・ケザン・チョペル校長が11月1日の日本経済新聞文化欄に書かれています。

16日の夜は、日本画の大学院生を中心に簡単な餅つきなどで、ささやかな懇親会を行い友好を深めました。

ブータン王国が誇り高い自国の文化を本当地道な農耕文化を含むレベルから継承していく様子や、ブータン王国の文化に対する熱い姿勢が見え、力強さを感じると共に、日本の農業における伝統技術の後継者問題などについて考えさせられました。

(芸術学部絵画学科日本画専攻教授 橋本 信)



## NEWS ● ⑥ 公募展受賞者紹介

- ねりんピック ぐんまファッションショー 第9回テキスタイル in 桐生 入選  
芸術学部 ファッション造形学科4年 津布工知恵
- ジャパン ファッションデザインコンテスト 山口 入選  
芸術学部 ファッション造形学科4年 津布工知恵
- ナゴヤファッションコンテスト 2004 入選  
芸術学部 ファッション造形学科4年 太田早紀

- 第4回 YKK FASTENING AWARDS 入選  
芸術学部 ファッション造形学科4年 太田早紀
- 神戸ファッションコンテスト 2004入選  
芸術学部 ファッション造形学科4年 牧野知佳
- IFTF (International Fur Trade Federation) International Fur Design Competition 2005 作品エントリー  
芸術学部 ファッション造形学科4年 牧野知佳

- 第6回日本刺繍公募作品展 優秀賞  
短期大学部造形学科デザインコース クラフトデザイン系刺繍 研究生 内田桃子
- ショートショート フィルムフェスティバル アジア 2004「ナショナル・ノン・ゴースト・エンカレッジメント」(奨励作品賞)  
芸術学部 メディアアート学科 4年 角田真依子他

## Topics ● 4 付属高等学校 中国との国際交流がスタート

### 「美」の交流の始まり

この度の日中国際交流記念「友好の美展」と本校生徒・教員の訪中は、友好の扉を開く大きな成果をもたらすものであった。パートナーとなった北京の中央美術学院附属中等美術学校（日本の高校に当たる）は、中国全土から100倍にも達する受験生の中から選抜された俊英を集めた美術専門の共学校である。

パートナーとして、この学校を選んだのは、そのエリート性の故ではない。初めてその学校を訪ねたのは13年前になるが、その時、限られた美術情報の中で、それ故にか、学生達が迷うことなく、一途にデッサンに励む激しいまでの集中力に接して感動したことがある。そうした現代中国美術の現状を糸口にしながら、宋・元に代表される中国文化の真価への理解を深めたいということがこの計画の底流にあることを言っておかなければならない。

11月8日、北京・中央美術学院美術館

における開幕式には、交渉の最初の当事者であった高天雄元校長、井上恵日本大使館文化担当官、その他、人民日報、文化報、北京日報の記者の姿もあった。

孫遜校長の司会のもと、中央美術学院副委員長で、中国美術家協会副主席を兼ねる呉長江先生の歓迎の挨拶を受けて、私は、先に述べたこの計画の経緯と理由を話し、今、念願が実現し、間違いなく友好の扉が開かれた喜びを語った。

更に日中双方の若い世代が、お互いに研鑽を重ね尊敬し合えるものを身につけ、一步一步理解を深めていきたい。同時に、日中が手を取り合って、西欧の「基準」ではないアジアの「基準」を作り上げていくことが大切であるとつけ加えて私の挨拶を終えた。

展覧会の開幕と同時に、会場は中国の生徒達で溢れ、本校の生徒達を囲み、豊かな色彩表現や自由な個性について、質問攻めにあつた。

その後も生徒同士の交流会、故宮をはじ

めとする文化遺産の探訪に同行してくれた生徒と共に友好の確かな手応えが感じられた。私たちは、この「芽」を来年中国側を東京に迎えることによって大事に育てていきたいと思う。

今回の訪中を一貫して誠意をもって遇してくれた孫遜校長先生をはじめとする中央美術学院の皆様にご心からの感謝を申し上げますと共に、交渉段階から全面的に協力を惜しまず、実質的に中野暁事務局次長を同行させてサポートしてくださった日中文化交流協会にも御礼申し上げたい。

（付属高等学校・中学校長 入江 観）



### 美術から生まれる国際交流

#### 「友好の美展」から始まった新たな出会い

入江 観校長に同行し、初めて中央美術学院附属中等美術学校を視察したのが2002年の9月。2年の歳月が経過したこの秋、念願の国際交流が実現しました。

両校の国際交流を記念して『友好の美展』と称する展覧会が、中央美術学院美術館で開催され、2004年度卒業制作の優秀作品10点を含む、本校高校生の作品238点が展示されました。開幕式に合わせ、団長の入江校長が率いる生徒5名を含めた女子美術付属訪中団が北京入りし、付属初の国際交流の1ページが開かれました。

中央美術学院附属中等美術学校（以下、附中と省略）の生徒も女子美術付属生も、ともに美術を学ぶもの同士。美術をもって通じ合い、友好を深めようと訪中団一同が想いを寄せ、出発の日を迎えたことはいまでもありません。

アジアに生きる私たちが、東洋の芸術文化の源泉ともいえる中国を知らずに美術を学んではいけないという、入江校長の強い示唆を受け、実現の運びとなったことを忘れてはならないでしょう。

訪中団メンバーに選ばれた5名は、『友好の美展』に作品が出品されるということ

が第一条件で、その他に中国との国際交流をテーマとした作文、総合成績と美術の成績、そして最終段階の個人面接という厳しい選考を見事にクリアした生徒たちです。

11月9日、そんな彼女たちの待ちに待った展覧会開幕式が行われました。百数十名から列席した附中の生徒たちが女子美術付属生を取り囲み、作品を前に意見交換が行われました。午後には、自由参加型の生徒同士の座談会があり、画学生らしい熱い質疑応答が続けられました。

翌11月10日、11日は、故宮博物院や中国国家博物館、北京市内を見学。万里の長城や明の十三陵、頤和園なども訪れ中国歴代の文化芸術に触れることができました。4泊5日の短い旅でしたが、貴重な体験ばかりが続きました。

11月29日には、全校生徒を対象に報告会を開き、北京での体験と感動を映像とトークで伝えました。本校の代表として派遣された訪中団の生徒たちは、その責任を十分に果たそうと努めてくれました。

「訪れた観光名所も良かったけれど、それ以上に附中の学校見学で見せてもらった生徒の作品や、直接交流した中で感じた彼

らの美術に対する強い姿勢に衝撃を受けました。」と語る女子美術生。附中側からは「女子美術生の色彩の豊かさや表現の自由さに驚きました。」という声が多く、同じ美術の基礎課程を学んでいても、いろいろな差異があることに気がつきました。違いに驚き、その理由を知る。それが相互の尊敬の念につながるのです。

確かな手ごたえを感じた今回の国際交流ですが、来年は北京から附中生が作品とともにやってきます。この新たな出会いを大切に、これからも真の友好を深めて行きたいと思います。

（付属高等学校・中学校 美術科教諭 遠山香苗）



## Festival ● ● ● 女子美祭2004 <杉並キャンパス>

2004年10月29日(金)～31日(日)の三日間、杉並・相模原両キャンパスで女子美祭が開催されました。今年の相模原キャンパスのテーマは「和」。杉並キャンパスのテーマは「女ギラギラ祭り」。今年是不運に

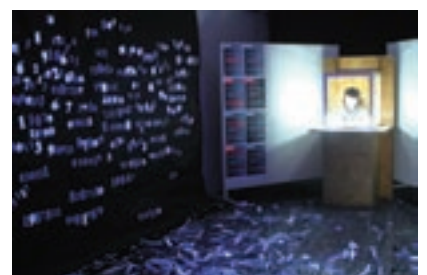
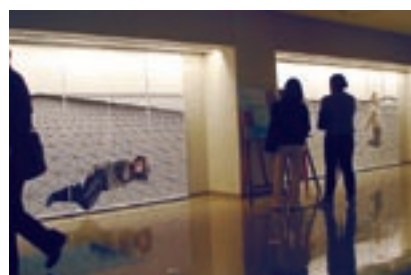
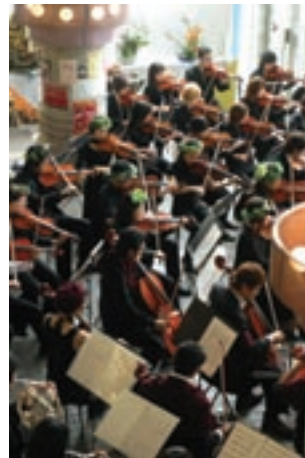
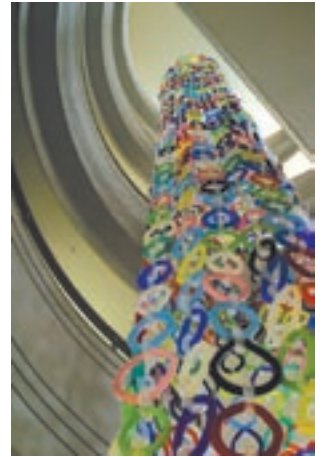
も雨に見舞われ、来場者数が減ることが懸念されましたが、相模原キャンパスは3日間で10,696名の来場者が、杉並キャンパスには11,398名の来場者があり、例年通りの盛り上がりを見せました。



# Festival

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

## <相模原キャンパス>



## J A M ● ① 女子美アートミュージアム展覧会・講演会 報告

### 展覧会開催報告

#### 江成常夫写真展 山河風光・ふる里相模川

市制50周年記念事業のひとつとして相模原市教育委員会主催で開催されました。郷土の写真家江成常夫氏より市に寄贈された作品のうち、神奈川県の特徴でもある相模川をテーマにした作品を中心に公開し、郷土愛の醸成と写真文化の振興を図る目的を持つ展覧会でした。会期中には、江成氏の講演会、高校生写真部員とのワークショップが開催され、奥行きのある展覧会となりました。ワークショップに女子美生がボランティアとして参加し活躍したことは、市と

大学の協力関係に良い効果を与えてくれました。  
(2004年7月7日-7月25日)



#### 女子美付属生・相模原市内中高生作品展 あっ、アート!

昨年の「アートってなあに?」につづく展覧会です。今回は、女子美中高に加え、相模原市内の12中学と6高校が参加しました。新しい試みとして、観客賞を設け、多くの票を得た10人の生徒に賞品を贈りました。生徒たちには励みになったことでしょう。芸術学科仙石教授と日本画橋本教授の協力により実施したワークショップも参加者に好評でした。

(2004年7月30日-8月29日)

### 作家からの贈りもの アーティストたちのおもちゃ

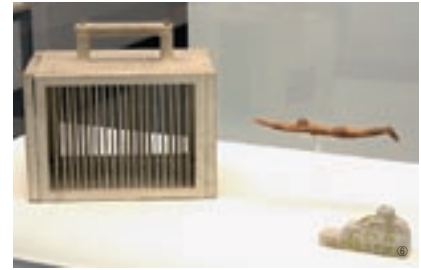
ピカソ<sup>①</sup>をはじめ、藤田嗣治<sup>②</sup>、香月泰男<sup>③</sup>、猪熊弦一郎<sup>④</sup>、有元利夫<sup>⑤</sup>、若林奮<sup>⑥</sup>、舟越桂<sup>⑦</sup>という7名のアーティストがつくった『作家からの贈りもの』を紹介しました。アトリエに転がっていた木の切れ端や素材のかけらたち、その素朴な存在が作家たちの手によって、大切な人への想いをこめた素敵なプレゼントになっています。この企画は、日頃見ることのない作家の家庭的な一面を、おもちゃという作品を通して感じ取ることができる貴重な機会を与えてくれました。

会期中に開催した、舟越桂氏と有元容子氏の講演会は、多くの聴衆を魅了しました。また、今回の企画には学生のグループが積極的に参加し、ロビーでの学生作品展示やワークショップで活躍しました。これは、今後のJAMの活動に大きな示唆を与えてくれました。

(2004年9月4日-10月18日)

### さがみ風っ子展

相模原市教育委員会主催で昨年に引き続き、JAMで屋内展示を行いました。昨年を上回る作品数と入館者数に圧倒された5日間でしたが、地域との連携をより強めることができた展覧会でした。  
(2004年10月28日-11月1日)



### 展覧会案内 <JAM>

#### ①「平成16年度 女子美術大学・女子美術大学短期大学部/退職教員記念展」

平成17年3月に定年退職される実技系の教員を記念する展覧会です。12月にガレリアニケで先行し、JAMに巡回します。芸術学部が彦坂章子教授(絵画学科)、後藤照雄教授(デザイン学科)、松崎笙子教授(デザイン学科)、山田愛子教授(デザ

イン学科)、短期大学部が小野和子教授(美術コース)、齋藤研教授(美術コース)、志賀洋清教授(デザインコース)、宮崎勝教授(デザインコース)の8名の先生方です。  
会期:平成17年1月12日(水)~2月25日(日)  
会場:女子美アートミュージアム  
主催:女子美術大学

#### ②「平成16年度 女子美術大学大学院 修了制作作品展」

平成17年3月に大学院を修了する院生の作品を展示します。作品領域は、洋画、日本画、版画、デザイン、映像、染織、陶芸等にわたり、多様な世界が展開します。  
会期:平成17年3月2日(水)~3月21日(月・祝)  
会場:女子美アートミュージアム  
主催:女子美術大学

## J A M ● 舟越 桂氏 「おもちゃのいいわけ」

### 講演会開催報告

JAM では、「作家からの贈りもの」展関連企画の一つとして、9月18日(土)に出品作家の一人である舟越桂氏の記念講演会を開催しました。舟越桂氏は、彫刻家として現在最も活躍している作家の一人です。講演は時にほほえましいエピソードや日々のご自分の心のありようなどをまじえながら、親としてどのように子供に接してきたかを作家としての本音で語られて、聞かす者に温かい人間性が伝わってくるものでした。質疑応答では、次々に続く質問に、時間が足りなくなるほど熱心にお答えくださいました。



### 講演要旨

あんなにかわいいおもちゃを作る人は、すなわち良い父親と誤解される。子供にとって良い父親かと自分のことを考えれば、全くそうではない。子供と遊んだり、良い時間を過ごしたりしたことは少なかった。上の男の子は何度か叩いたこともある。下の女の子には叩きはしなかったが、父親、夫として家族を大事にしてきたとはいえない。アーティストは、たとえ良い作品が出来たとしても、作品の良さが人間の善さではない。

子どもにおもちゃを作っている時一番感じたことは、作るおもしろさであった。子どもの喜ぶ顔を想像はしているが、一番感じたのは自分がわくわくどきどきする感覚であった。相手のためだけにやっているのではなく、自分が気持ちよく楽しんでい



るという子どもに対しての後ろめたいものがあるので、おもちゃの話をする時は、誤解をされないようにここから切り出すようにしている。

(著書『おもちゃのいいわけ』の作品を見せながら)

ブリキは、ふっと思いついた素材で、木彫に使ったら生きてきた。クラシックカーを作った時、昔の車のフェンダーが美しくのびやかな形で、それを表すのに木彫でなくブリキがぴったりきた。勢いよく強引にやったからうまくいったといえる。彫刻の素材や形がベストでなくても、その時間の過ごし方が前向きな場合、強さが出る。一台目のクラシックカーが一番力があると思う。最短時間でできた。一番勢いがある。ブリキは、何年か後に彫刻に使った。

計画性もなく思いついたままのイメージで何かおもしろいものが見えたとき、本当は子どもと遊ぶべき時間なのに子どものためのおもちゃを作る方にとりかかった。意外な素材との出会いがあり、おもちゃをつくることの中にある種の収穫がある。たと



えば、軍手で作ったウサギは、皮の感触が独特のものがあり、他にも皮を使うアイデアも持っている。作品のパーツをつなげる部品として皮を考えている。

自分の作るおもちゃは動くものが少なかったので子どもたちがあまり遊ばなかった。遊べるおもちゃを作ろうと意図して作っ



たのが、ヤギの木馬とドールハウスであった。実際子どもたちが喜んで長く遊んでくれた。娘が中学生の頃、友達とおしゃべりしながら、木馬に座ってゆらゆらさせているのを見るのはうれしかった。この木馬は、雑誌の写真をみてコピーした。ボタンを飛ばしてカップに入れる「びんびん」というおもちゃも古いアメリカのおもちゃのコピーである。小学生の頃の息子と娘がこれで遊ぶのをコーヒーを飲みながら見ているのは楽しかった。子どもたちは、父親の作ったものを粗末に扱うことはなかった。

二冊の絵本は、妻に贈ったもの。一冊は、クリスマスのうた「リトル・ドラマー・ボーイ」で、もう一冊はルイ・アームストロングの「ホワット・ア・ワンダフル・ワールド」である。どちらも歌詞がよい。小品のいい歌がもっと絵本になっていいのではないかと思う。

おもちゃを作ってきたなかで、自分にとって一番大きかったのは素材との出会いであった。毛糸の帽子は存在感や材質が新鮮であった。木彫を作っているが、いろんなことを決めてしまわないようにと言われているように感じる。

作品制作には楠を使っている。楠は、香りがよく固さ、やわらかさが自分に合っていた。自分の作風が見つかる中で楠に絞られていった。

子どもも大きくなったので、もうおもちゃは作っていないが、これから素材の遊びはするし、自分のためにおもちゃを作るとは思っていない。おもちゃを作ったことが、作品のなかに現れていると思う。

(美術資料センター)

## NEWS ● 7 大学院に新専攻、新研究領域が誕生

2001年度に新たに芸術学部開設した立体アート学科、メディアアート学科、ファッション造形学科の学生たちがこの春卒業を迎えます。これに対応して2005年度、美術研究科修士課程美術専攻に立体芸術、デザイン専攻にメディアアート造形、ファッション造形の研究領域が新たに開設されます。デザイン専攻にはさらにヒーリング

造形の研究領域が開設され、新設3領域でインターメディア分野として社会とリンクした研究、クロスオーバーなメディアや研究に対応していきます。また美術専攻の工芸の研究領域には従来の染、織、陶のコースに加え、「ガラス」と「刺繍」のコースが新設されます。さらに従来美術専攻とデザイン専攻にあった「美術史」と「色彩学(計画)」の

領域に新領域「芸術表象」を加え、新しく「芸術文化専攻」が開設されます。

新しい大学院では所属以外の専攻の実技・演習科目の履修も可能な柔軟なカリキュラム編成をとり、分野の枠を越えた幅広い創造活動が可能となります。新設研究領域からどのような研究や作品が生まれるか、今後の大学院生の活躍が期待されます。

## NEWS ● 8 文科省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択

平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」に、本学の取組「美大におけるサービス・ラーニングの実践ーアートを通じた大学と医療・福祉施設との連携」が採択されました。

「特色ある大学教育支援プログラム」は、各大学がおこなっている大学教育の改善につながる取組のうち、特色のある、優れたものを文部科学省が選定し、公表するものです。採択されたプログラムを参考にして

他の大学・短期大学が教育の改善・改革を進めることで、高等教育全体が活性化することを狙いとしています。

平成16年度は、国公私立の大学、短期大学から534件の申請があり、その内58件が採択され、昨年7月30日に公表されました。

本学の取組は、平成4年より実施している「癒しの壁画(ヒーリング・アート)プロジェクト」を中核とするプロジェクトです。これは古い病院や公共施設にありがちな冷たい雰囲気的空間を明るく快適に変えるために「ヒーリング・アート(Healing Art)＝癒しの芸術」としての壁画をそれらの施設に設置することで、病気への前向きな気持ちや人が本来もっている自然治癒力を高めることを狙いとする活動です。現在までに442名の学生が参加し、26箇所の医療・福祉関連施設に壁画を設置してきました。このプログラムの特長は、単にこれらの作品を設置するだけでなく、活動の



社会的意義・効果などを学生自身に考えさせ、また、学生たちはプロジェクトを通して医療・福祉施設関係者や高齢者・障害者・子供たちなどから活動への評価や意見を受けるという「サービス・ラーニング」としての位置付けを重視している点です。さらに学生は、学部・学科の枠を超えての共同創作を通して専門分野ごとに異なる方法論や感性を教え合いながら、自分の専門分野での創作にも応用できる新しい気づきや発見を得ており、大変有意義なプロジェクトであるといえます。



## NEWS ● 9 文科省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択

文部科学省の平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に、本学を含めた首都圏西部地区にある28大学(※)が行っている「大学間連携による教養教育への総合的取組」が選定されました。「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」とは、社会的要請の強いテーマを設定し、各大学等から申請された取組の中から、特に優れた教育プロジェクトを選定し、財政支援を行うことで、高等教育の更なる活性化が促進されることを目的とするものです。今回採択された具体的な取組は以下3つです。

教養教育への総合的取組Ⅰ：各大学が提供する多彩な教養科目の中から学生が履修

したものを所属大学の単位として認定する「単位互換制度」を実施する(平成11年度より)。

教養教育への総合的取組Ⅱ：半期ごとに学生の希望に合わせた統一テーマを設定し、隔週土曜180分のオムニバス形式の教養科目として「共同授業」を開講する(平成13年度より)。

教養教育への総合的取組Ⅲ：大学における教養教育の実現には、前段階における導入教育(大学前教養導入教育)が必要であるため、高校生に「共同授業」の受講を認め(平成14年度より)、「高校生のための“大学”セミナー」を開催する(平成15年

度より)。

※桜美林大学・大妻女子大学・國學院大学・国士館大学・高千穂大学・玉川大学・東京工芸大学・東京女学館大学・東京農業大学・麻布大学・神奈川工科大学・鎌倉女子大学・相模女子大学・産能大学・松蔭大学・昭和音楽大学・女子美術大学・田園調布学園大学・女子美術大学短期大学部・東京田中短期大学・ヤマザキ動物看護短期大学・山野美容芸術短期大学・和泉短期大学・相模女子大学短期大学部・湘北短期大学・昭和音楽大学短期大学部・田園調布学園大学短期大学部・横浜美術短期大学



Series ● ● ● —シリーズ歴史資料紹介⑨—

## 女子美のルーツを訪ねて (L.L. ジェーンズからの影響)

### 横井玉子はなぜ美術学校を創ったか。 そのⅠ

本校創立者の一人横井玉子は2004年に生誕150年を迎えた。初めて女性に美術の道を開き、心を解放して幸せをもたらし、我国独特の画風を世界に知らせる礎を創った人である。その名は女性史、美術史上に輝くことになるであろう。今回はなぜ、玉子が美術を専門とする女子校を創立したかに関わるそのルーツについて紹介したい。

開校当時用意されたのは西洋画、日本画、彫刻、蒔絵（漆器に絵付け）、造花、編物、刺繍、裁縫の8科である。1900年の同じ頃創立された女子校は例外もあるが、良妻賢母教育を柱とし、その校主のほとんどは和服仕立て、ミシン関係であり、家政科を立ち上げ、美的センスを磨くよりも技術重視であった。女子美を創立した玉子と他校創立者の着眼点の違いは、西洋と日本の発想の相違のようで、玉子には西洋人から受けた教育が強く影響していると思われる。

玉子は安政元年（嘉永七年）1854年、黒船来航の翌年、江戸、鉄砲州（東京、築地）細川家藩邸で家老の原伊胤の娘として生まれ、騒然とした世相の中で13歳まで育ち、変わろうとする日本のエネルギーを見事に受けとめた感性豊かな少女であった。維新の頃熊本へ移住、明治5年（1872年）アメリカ留学より一時帰国した横井左平太（別名伊勢佐太郎）と結婚した。彼は弟大平、



熊本市教育委員会文化財課所蔵

勝海舟の長男らと1866年に密出国し、ラトガースの学校で学んだが、肺を病んだ大平は明治2年（1869年）に帰国し、日本の将来を憂えて熊本洋学校創立を提案し、アメリカ人ジェーンズを教師として招き、明治4年（1871年）熊本洋学校が開校した。（その3ヶ月前に大平は死去 22歳）

この洋学校は土農工商すべての子弟が男女を問わず入学できる日本初の共学校で、34歳で妻子とともに来日したジェーンズは一人で数学、英語、物理、化学、地理、歴史、天文、生物等を日本語を使わずに講義した。玉子（伊勢タマ）は結婚後再渡米した夫の留守中、義母つせと暮しながら、義妹みや、親戚の徳富初子（蘇峰、蘆花の姉）の三人と共に熊本洋学校で授業を受けた。この間にアメリカフィラデルフィアに創立された女子美術学校（現ムーアカレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン）の話も玉子はジェーンズ夫妻から直接聞いていたに違いない。1848年創立された同校は女性のための美術学校で、現在でも女子の美術専門の大学は世界に本学とこのムーアの2校のみである。創立者のサラ・ワーシントン・ピーター女史は、産業革命で機械化が進み、家事労働から少し解放された時間を使い、女性の地位向上のために自立できる職業を身につけさせたいと考え、テキスタイルデザインの学校を創った。洋の東西を問わず、女性が人間として男性と同じ心をもつ存在と認められておらず、身売りが親孝行、女性は子供を産む道具や性の相手としてのみ見られる時代があったのである。

明治4年より9年まで滞在したジェーンズは何よりも人間性を尊重し、日常生活の充実こそ全ての基礎と考える人であった。南北戦争では奴隷解放のため戦い、日本女性も人間らしく幸せにすることが、共に生きる男性にとっても喜びになることに着眼したに違いない。彼は、母国より取寄せた種子で日本にはまだなかった野菜の育て方や、国産のタンパク質の多い小麦の栽培法を広め、パンを作り、牛肉、牛乳を勧め、自動印刷機を取寄せるなど、多方面の文化に貢献した。玉子はこれほどの能力ある師



ジェーンズ邸

から精神面、生活面ともに多大な影響を受け、そのスピリットは深く魂に刻み込まれたであろう。幼い頃より異国の人には恐れと憧れを抱き続けていたが、初めて出逢ったのがジェーンズ夫妻というのは誠に幸運であった。夫人から洋裁、洋料理も学んだことで縫い方や切り方よりも色彩や形を重視し、家事と美を結びつけて考えるようになったことが、彼女の遣した料理著書や女性を啓発する数々の論文からみてとれる。また、玉子が女子美の制服にと考案したのも、上衣の打合わせは着物式で、袖は洋風に肩をふくらませ、下衣は袴で編上げ靴と組み合わせた、非常に動き易い独創的なものである。

ジェーンズの邸宅には彼の高潔な人格を慕う者が集まり、邸内で聖書研究会が開かれ、後に熊本バンドと呼ばれる集まりが結成された。これが明治九年、師の帰国後、新島襄の設立した同志社英学校（同志社大学）の核となり今日に至った。

#### 付記

このテーマを書き上げながら湧いてきたL.L. ジェーンズ氏に関する疑問を熊本洋学校教師ジェーンズ邸に問い合わせたところ、平成16年6月15日、館長の櫛野喬一氏より次の回答が寄せられた。

- 1 本名はリロイ・ランシング・ジェーンズ
- 2 出身地はオハイオ州、ニューフィラデルフィア

（女子美術大学歴史資料整備委員 青木純子）

## NEWS ● 10 100周年記念大村文子基金

創立100周年記念事業の一環として、「100周年記念大村文子基金」は、平成11年に大村智名誉理事長夫妻からの寄付を基に、文子令夫人のお名前をいただいて設立されました。この基金によって運営されている「女子美パリ賞」(第6回)、「女子美制作・研究奨励賞」(第4回)、そして本基金の目的のために功績のあった方、及び団体に贈られる「大村特別賞」が以下の方たちに授与されました。

### ●女子美パリ賞

・高木 彩 (平成14年本学大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画領域修了)

### ●女子美制作・研究奨励賞

・後藤玲子 (昭和52年本学芸術学部産業デザイン科卒業、昭和62年サンフランシスコアートインスティテュート マスターオブファインアーツ修了)  
 ・中村由紀 (平成6年本学芸術学部工芸科卒業、平成9年ワシントン大学大学院芸術研究科修了)  
 ・馬場知子 (平成3年本学芸術学部絵画科洋画専攻卒業、平成4年本学芸術学部絵画科洋画専攻研究生修了)



高木彩 「pointe du jour」2004 162×130.5mm

### ●大村特別賞

・太田早紀 (本学芸術学部ファッション造形学科在籍中、「第21回ファッションクリエイター新人賞国際コンクール」日本グランプリ受賞)



後藤 玲子「3Rivers 2nd Nature」



馬場知子「trace -heure-」2003  
840×1200mm etching edition 15



太田 早紀



中村由紀  
「レッド・ステアー」2003  
ベルベット、木、フォーム、キャスト  
200×76×102mm  
Photo: Kozo Takeuchi

## NEWS ● 11 ミズノ×リーバイスジャパン® コラボTシャツデザイン採用

アテネオリンピックが行われた今年の夏、「地球市民の一員としてスポーツを通じた社会貢献と世界平和」を表現した3つのコラボレーションTシャツが日本のスポーツメーカーミズノとジーンズトップブランドのリーバイス®によって共同開発されました。

Tシャツデザインは、大学院修士課程美術研究科美術専攻洋画領域1年の喜多小百合さんと河野紫さんが担当されました。「つながり」と「掛け橋」をテーマに、人と人、国と国、会社と会社が1つになっていくイメージと、両袖に配置したミズノと

Levi's のロゴをTシャツ中央のブリッジで繋げた「平和の掛け橋」。一人一人が相手のことを認め合って生まれる一体感と、「Athene」の文字+アメリカの地図をイメージした「平和の祭典」。一つの情熱が更なる情熱を呼び! そんな波動が平和に繋がるというコンセプトの「World Peace」の3種類です。メンズ・レディースが作られ、限定生産されました。これらは全国26店舗のリーバイスストア、ミズノ直営店およびYahooのネット上で昨年7月31日より期間限定販売されました。



## 訃報 -山代 巴さんを悼む-

中国山地の農村に生きる女性の苦難の生涯を描き、のちに映画にもなった小説「荷車の歌」などで知られている作家、山代巴さんが、昨年11月7日に杉並区の病院で逝去されました。享年92歳。広島県に生まれ、画家を志望して本学の前身である女子美術専門学校に入学され、在学中にはプロレタリア美術に関心

を持ち反戦運動に携わっていらっしゃいました。経済的理由から中退した後、労働運動を通じて知り合った夫とともに治安維持法違反で摘発され、終戦まで獄中で過ごされ、戦後は、広島県で農民・農村文化運動や主婦の生活記録運動、原水爆禁止運動に取り組みながら創作をはじめられました。ベストセラーになった「荷

車の歌」では日本文化人会議の平和文化賞を受賞され、戦時下の獄中で生きる女たちの連帯する姿を描いた自伝的小説「囚われの女たち」などの作品も残されています。2002年には広島県双三郡三良坂町に山代巴文学研究所も設立されています。ご冥福をお祈りいたします。

前号149号におきまして、記載に誤りがございました。ここに訂正いたしますとともに深くお詫び申し上げます。  
 P10 「美の仕事 女たちのランウェイ」  
 ・国方コックラムみどり → 國方コックラムみどり  
 ・陣内昭子 (朝工ソティ資生堂 クリエイティブディレクター)  
 → 陣内昭子 (朝工ソティ資生堂 クリエイティブディレクター)  
 ・出川遥子 → 出川 遥子  
 P11 廖承志の書「桃李滿天下」  
 ・中国・深圳市 → 中国・深圳市

広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。  
 《広報課》 TEL. 03-5340-4513  
 FAX. 03-5340-4523  
 [E-mail] prs@joshibi.ac.jp  
 URL http://www.joshibi.ac.jp

発行 学校法人 女子美術大学  
 〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8  
 企画・編集 企画部 広報課  
 監修 山田 愛子  
 発行日 平成17年1月11日